

報告と記録

1. 連続講座「ベートーヴェン演奏を考える 2003」
2. 《第9交響曲》シンポジウムと研究会

報告者：藤本 一子

1. 連続講座「ベートーヴェン演奏を考える 2004」

- 第1回：分析と演奏 《ディアベリ変奏曲》を解析する 5月28日(金)16:30～講堂小ホール
講師：野平一郎
- 第2回：お話と演奏 「ウィルヘルム・マイスターの歌曲」 9月10日(金)16:30～講堂小ホール
講師：檜山哲彦、演奏：岩淵嘉瑩(Ten)・本島阿佐子(Sop)・掛谷勇三(Pf)
- 第3回：お話と演奏 「ベートーヴェンの編曲作品」 9月30日(木)16:30～6-110スタジオ
講師：土田英三郎・藤本一子、演奏：永田平八・本学卒業生および学生
- 第4回：お話と演奏 「シューベルトにみられるベートーヴェンの影」 11月19日(金)16:30～6-110スタジオ
講師：磯山 雅、演奏：今井頤 (Pf)
- 特別講座：パウル・バドゥーラ＝スコダ教授を迎えて 「ベートーヴェンのピアノ曲における強弱法」
7月1日(木)16:30～19:10 講堂小ホール、公開セミナー：ピアノ・ソナタ作品57《熱情》
講師：パウル・バドゥーラ＝スコダ教授、通訳：今井頤、賛助出演：三好優美子 (Pf)

連続講座「ベートーヴェン演奏を考える」は、ベートーヴェン研究部門が活動の枢軸に位置づけているシリーズである。2004年度は4回の講座が企画され、それぞれきわめて充実した内容であった。ベートーヴェン研究部門が提唱してきた、学的研究と演奏実践の共同作業が実を結んできた、との感を強くする。

第1回は客員所員 野平一郎氏による《ディアベリ変奏曲》解析講座である。演奏家・作曲家として、現代に生きるベートーヴェン演奏のあり方を探求している野平氏。氏の解析は、作品を構成するモチーフの緻密なネットワークを明快に解き明かしながら、単なる音楽素材の集積を超えた、ベートーヴェン独自の宇宙的ともいふべき音楽世界を示してくれる。今回の《ディアベリ変奏曲》もそうであった。難解といわれるベートーヴェン最後のピアノの大作を前に、その手法が変奏ごとに明らかにされていく過程を、興奮とともにうけとめた聴衆は多かったと思われる。なお当日は《6つのバガテル》Op.126の演奏も予定されていたが、解析講座が延長されたために実現しなかった。講座内容に

については本年報別稿を参照されたい。 113 ページ

第 2 回はゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』に登場する歌をめぐる講座。小説では、ミニョン・豎琴弾き・フィリーネによって 9 つの歌が歌われる。そしてその魅力的な詩に数多くの作曲家が曲をつけてきた。ところがこれらはドイツ歌曲の必須レパートリーとなっているにもかかわらず原作の文脈において解釈されることはほとんどなかった。そこでドイツ文学者を迎え、この側面から歌曲のイメージを鮮明にしようというのが企画の趣旨である。とりあげた歌曲はベートーヴェン・シューベルト・シューマンによる作品。檜山哲彦氏（ドイツ文学）が原作を要約しながらその流れに置いて詩を朗読し、解釈を行う。続いて歌曲が演奏される。こうして展開する時間の中で、それぞれの歌曲は新しい生命を得ていくようだった。文学と音楽のこの共同作業は大きい成功を収めたと感じたい。本学教員の岩淵嘉瑩、本島阿佐子両先生のご協力に感謝致します。

第 3 回の講座テーマは当研究所がながらくあためてきた「ベートーヴェンの編曲作品」。ベートーヴェンの時代には音楽作品はさまざまな編曲で楽しまれていた。最近はその編曲版の録音も現れ始めたが、演奏の機会は多くない。本講座では当時の音楽状況をふまえ、ベートーヴェン作品を編曲版で聴き、その面白さを体験していただくというもの。本学附属図書館が当時の編曲楽譜を数多く所蔵していることも本企画を推進する要因のひとつであった。担当の土田氏は、誤植の多い当時のパート譜を逐一チェックした上で演奏者の指導も行うという重責を担うこととなったが、その労苦は実を結び、編曲作品の面白さの一端を伝えることができたと思う。19 世紀ギターを携えて出演された永田平八氏に感謝申し上げます。なお当日の配布資料から使用楽譜ほかを本稿末尾に掲載したので参照されたい。 本年報 225 ページ

【当日の曲目】ピアノ・ソナタ第 8 番 Op.13《悲愴》 楽章 弦楽五重奏版 / 弦楽四重奏曲 Hess34
 , , 楽章 / 《あなたを想う》WoO136 (ギター伴奏) / 《アデライーデ》Op.46 (ギター伴奏) /
 イギリス民謡《すてきな若者ジェイミー》Op.108-5 / 《悲しく不幸な季節 [庭の千草]》WoO153-6 /
 《過ぎ去りしなつかしき日々[蛍の光]》WoO156-11 / 《ゴッド・セイヴ・ザ・キング》WoO157-1/交
 響曲第 2 番 Op.36 楽章 (九重奏版)

ベートーヴェンと深い関連のある別の作曲家に光をあてることもまた、当研究部門の課題のひとつである。第 4 回の講座「シューベルトにみられるベートーヴェンの影」では、ベートーヴェンと同じ時代に同じ場所で活躍したシューベルトがとりあげられた。礒山所長の解説によって、ベートーヴェンとシューベルトの様式が平明に対比され、これらを通じてシューベルトの資質が浮かびあがってくる。“平明に示す”ことは、とかく研究者の場合二次的に考えられがちだが、じつは数多くの研究材料をある方向に収斂させ、わかりやすい表現で示すことほど重要な作業はない。平明化に際しては大胆さも要求される。今井氏による当意即妙のピアノ演奏も解説のリアリティを深める助けとなった。後半はシューベルトがベートーヴェンの影響を受けながら独自の響きを実現したピアノ・ソナタ八短調 D959 が演奏された。

特別講座はオーストリアのピアニスト・音楽学者パウル・パドゥラ＝スコダ教授を迎えてのベート

ーヴェンの演奏法。教授による前回の講座はきわめて好評を博し、続編が待望されていたが、ここに実現することができたことを感謝したい。教授の温厚かつ誠実な人柄は講座内容にも反映している。選び抜かれた例をもとに、的確な言葉とよいテンポですすめられる。テーマは学習者にとって困難な課題である「音楽に内在するデュナーミク」。スコダ教授の講座は今回も参加者の共感を読んだが、すぐれた通訳あってこそその成功であることも強調しておきたい。第2部は公開セミナーが行われた。講座内容については通訳を担当した今井氏による別稿を参照されたい。141ページ

2. 《第9交響曲》研究会

第4回：《第9》の受容史と作品解釈 7月16日（金）16：30～ 6-112 教室

講師：土田英三郎

第5回：《第9》の演奏論 9月15日（水）16：30～ 6-110 スタジオ

講師：森 泰彦

第6回：《第9》を分析する 10月22日（金）16：30～ 6-110 スタジオ

講師：野平一郎

第7回：シンポジウム「高関健が語る《第9》」12月3日（金）16:30～ 6-101 大講義室

出演：高関健・礪山雅・土田英三郎

多様な角度からの、幾通りもの研究を通して全体像が明らかになってくる特別な音楽作品というものがある。そうした作品を考察しようとの趣旨で設定されたのが当部門の「連続研究会」である。2002年度は《ミサ・ソレムニス》、そして2003-2004年度は《第9交響曲》。本年2004年度はその第2巡となる。前年度と同じく、長らく《第9》研究に携わってこられた土田英三郎氏を座長に、予定通り3回の研究会と1回のシンポジウムが行われた。

2003年度も含め、全7回を通してさまざまな角度から研究会が行われたが、最大の収穫は、音楽学以外の領域からの参加であろう。特定の音楽作品に関する研究会に、演奏家・作曲家・研究者各氏に発表していただくことは、現実的な点で、容易ではない。その意味で2年にわたる『第9研究会』はきわめて恵まれた時間であった。音楽学からの参加者と並んで、2003年度の檜山哲彦東京藝術大学教授（ドイツ文学）、2004年度の野平一郎氏（作曲家・ピアニスト）および高関健氏（指揮者）によって充実した発表がなされ、研究所の活動としてもひとつの指針が与えられたと思う。この成果をふまえ、さらに当研究所ならではの企画を推進していきたい。

2004年度の初回にあたる第4回は座長である土田栄三郎氏により、《第9》の壮大な作品史に寄与するものとして「受容」に光があてられた。《第9》ほどの大きい作品となると、受容のあり方やプロセスもまた、現在の作品体験に影響を及ぼしている。当日は幾つかの例が紹介されたが、その膨大な内容は、点描であれ、2時間で網羅されるものではない。提示された詳細な資料が一部「2003

年度研究年報」に先取的に掲載されているので参照されたい。 2003年度年報 133 ページ

第 5 回は「第 9 演奏論」。この講座でとりあげられたのは、楽譜テキストと演奏解釈の問題というよりは、むしろ録音の歴史を通じてみる《第 9》演奏の変遷といってもよいもの。演奏を語るための具体的な材料として私たちの手元に残されているのは、録音された音源に限定されざるをえないからである。当日は膨大な量のディスコグラフィが配布され、これを追っていく形ですすめられた。担当者による論考が掲載されているので別考を参照されたい。 95 ページ

第 6 回は作曲家野平一郎氏による「第 9 分析論」。譜面台におかれたスコアを前に、ご自身で演奏しながらの分析講座。聴き手の理解を助けるために、楽曲構造図（土田英三郎氏）を手がかりに形式と内部構造の分析が行われた。作曲家として独自の見地から行われる分析は刺激的であり、とくに第 3 楽章の変奏風の楽句構成に対して、野平氏独自の構造分析が提示されたように思う。2 時間という時間制限のために、残念ながら第 4 楽章を残すこととなった。

第 7 回は 2 年にわたった『第 9 研究会』のしめくくりでもあるシンポジウム。指揮者高関健氏を迎え、交響曲の歴史を塗り替えたこの大作について語っていただくというもの。磯山所長の司会のもと、座長である土田所員をまじえて行われた。《第 9》の場合、楽譜の成立事情がほかの作品とはかなり異なっており、作曲者が最終的に了解した楽譜が存在しない。すなわち正しい楽譜テキストを特定することが難しい状況にある。それでは指揮者は、現行の楽譜のなかでどの版を用いればよいのだろうか。高関氏は、楽譜を丹念に研究する指揮者としても知られているが、じつは話題の「ペーレンライター版」を日本で最初に用いた指揮者でもある。氏は公刊される前からこの版に関心を寄せ、下刷り版をもとに研究を重ねておられた。シンポジウムでは、そうした氏の長年にわたる楽譜研究の知見をふまえ、多くの指揮者たちの演奏の特徴や高関氏ご自身の取り組みが語られた。高関氏がこのシンポジウムに周到な準備でのぞまれたことを追記して、ご参加に感謝申し上げます。

3. 図書館展示：ベートーヴェンの編曲作品 作品のいっそうの普及と収益のために

上記講座「ベートーヴェンの編曲作品」と連動するかたちで、附属図書館において展示が行われた。充実したパンフレットが作成されたこと、次の楽譜が展示されたことを報告しておきたい。

当館所蔵の《第 9 交響曲》関連の貴重楽譜から：

《第 9 交響曲》自筆スコアのファクシミリ / 《第 9 交響曲》初版スコア / 《ミサ・ソレムニス》初版スコア / 《第 9 交響曲》パリで出版された版 / 《第 9 交響曲》C. チェルニーによるピアノ連弾用編曲の初版 / 《第 9 交響曲》F. リストによる 2 台ピアノ用編曲版 / 《第 9 交響曲》カルクブレンナーとエッサーによる独奏ピアノ編曲版 / 《第 9 交響曲》R. ヴァーグナーがパイロイト祝祭劇場定礎式典で《第 9》を演奏した際の、ヴァーグナーによる変更が書き込まれた楽譜 / 《第 9 交響曲》ブルカルトによるピアノ連弾・ヴァイオリン・チェロのための編曲版

〔これら貴重楽譜の詳細については、当ベートーヴェン部門ホームページ『国立音楽大学附属図書館所蔵ベートーヴェン初期印刷楽譜目録』をご覧ください。〕